

研究区分	教員特別研究推進 地域振興
------	---------------

研究テーマ	「手で見る」鑑賞方法についての研究				
研究組織	代表者	所属・職名	短期大学部・教授	氏名	藤田 雅也
	研究分担者	所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発表者	所属・職名	短期大学部・教授	氏名	藤田 雅也

講演題目	「手で見る」鑑賞方法についての研究
------	-------------------

研究の目的、成果及び今後の展望

【研究の目的と概要】
 本研究の目的は、立体の作品や形状を鑑賞する方法として、「手で見る」鑑賞方法（触る行為による鑑賞）に着目し、その教育的効果について考察することである。これまでの研究において、乳幼児、小学生、中学生、大学生、計 802 名を対象とした立体形状を触る行為に関する調査を継続的に実施し、調査結果の分析を基に、選好する形状や触り方についての傾向を検討してきた。その結果、どのような配置であっても、「球」の形状を選好して触る傾向が強いことや、形状によって特有の行為が顕著に見られること等が明らかとなってきた。また、これらの結果は、年齢にかかわらず、同様の傾向が現れることも分かってきた。ただし、中学 3 年生になると、触る行為の出現率が大幅に減少する傾向があることが明らかとなり、思春期から青年期にかけての触る行為の実態についてのさらなる検証の必要性が浮上した。この課題を究明するために、本研究では、高校生 146 名を対象とした、立体形状を触る行為の実態を把握する調査を実施し、触りたいと感じる形状や触り方について 0 歳から 20 歳までの発達段階を踏まえつつ考察した。

【成果及び今後の展望】
 本研究において、高校生を対象とした調査を実施したことにより、0 歳から 20 歳までのすべての年齢・学年の実態を同一条件にて把握できたことは一連の研究による成果である。本研究を通して、高校生は「球」を最初に触る傾向が強く、最も触りたいと感じる形状も「球」であることが確認できた。一方で、中学 3 年生から高校 1 年生にかけては、「球」を触る行為が減少し、高校 3 年生まで停滞する傾向があることも明らかとなった。

動画記録の分析から、手触りを探索したいときには左右に《なでる》、硬さを探索したいときには《押す》、重さを探索したいときには《持ち上げる》などの行為が伴うという実態を把握することができた。S. Lederman らによる、成人を対象とした探索行為に関する研究などで明らかにされてきた、形状や素材の性質を知るための触動作の傾向について、高校生においても同様の実態が確認できたことの意義は大きい。

0 歳から 20 歳までの計 948 名を対象とした一連の本研究に基づく調査結果を、心理学や運動機構学などを専門とする研究者の知見を踏まえながら、さらに精緻に分析することによって、触る行為における心理的かつ身体的な側面からのより具体的な省察が必要である。

なお、本研究の成果は、2024 年 3 月に発刊された、日本基礎造形学会の学会誌『基礎造形』第 32 号 (p. 33-p. 40) に収録されている。